

2023年7月3日

# アジア研究図書館

新任教員自己紹介 (板橋 暁子)	1
新着資料紹介	2
五味政信氏旧蔵ベトナム語関係資料について (澁谷 由紀)	
アメリカ国立公文書館調査記 (河野 正)	5
Oriental Research Institute Mysore 他3館での初調査 (谷口 力光)	8
連載 アジアの言語・文字体系 第7回	10
デモティックの学習について (宮本 彩芽)	
アジア研究図書館利用案内	
次号の予定	
編集後記	

編集・発行: 東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門  
(RASARL)

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学附属図書館 アジア研究図書館担当

asialib@lib.u-tokyo.ac.jp

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

## 新任教員自己紹介

板橋 暁子

(附属図書館アジア研究図書館研究開発部門 助教)

(略歴)

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了、博士(文学)。専門は魏晋南北朝史。主要業績として『東アジアの家族とセクシュアリティ：規範と逸脱』（共編著、京都大学学術出版会 2022年）、『中国ジェンダー史研究入門』（共著、京都大学学術出版会 2018年）等。

\* \* \* \* \*

筆者は RASARL 東アジア地域の担当者としては三代目にあたり、初代の鈴木舞氏は殷周考古学が、二代目の河野正氏は現代中国史がご専門なので、研究対象からいえば概ねその中間に位置している。

現代の我々が東アジアの「伝統社会」と認識している社会像は実際には近世（中国であれば明清時代）に由来するところが多いと指摘されるが、その「伝統中国」の像を基準にした場合に異端だとみなされるような現象が――筆者の関心に関連づけていえば、たとえば親族結合やジェンダー／セクシュアリティの面において――しばしば出現するのが魏晋南北朝時代、ひいてはその前後を含めた漢唐間である。

一方で漢から唐の間はまた、中国において目録学が整備され発展を始めてゆく時期といえる。中国の目録学は時を追って改良が加えられるものの、古来の蓄積がよくふまえられて基本的に断絶せず、現代にいたるまで漢籍分類法として継承されている。つまり目録学の発展史からいえば、漢唐間

とは「伝統」の土台が築かれた草創期であり、後世との連続性が大きく、異端の時代では決してない。

伝統中国における目録学と現代における図書館学がそのまま対応するわけではないが、図書をどのように分類し、その基本情報を整理し、全体の体系を構想し、空間と資金に限りがある中でいかなる図書を取捨選択して人々に提供し後世に伝えてゆくべきかを考え抜く、そういった基本的な使命は古今東西いずれの図書館でも通じるころがあると思われる。本年4月より当館に着任したことで、アジア研究の各分野にて連綿と受け継がれてきた学術の成果をより多くの人々が確実に享受できるようになること、それを実現するための業務の一端を担ってゆきたいと願っている。



新着資料紹介

## 五味政信氏旧蔵ベトナム語関係辞書について

澁谷 由紀

(附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門(U-PARL) 特任研究員)

2022年度末、アジア研究図書館の参考図書コーナーにベトナム語に関する辞書27冊が配架された。これらは『学習者用ベトナム語辞典』の著者として知られる五味政信氏(一橋大学名誉教授)から受贈したものである。とくに人文・社会科学分野や自然科学分野の専門用語を収めたベトナム語と二つ以上の外国語の対訳辞書が多く、他にベトナム語と少数民族語の対訳辞書、ベトナム語の生徒・学生向け辞典等もある。



アジア研究図書館の参考図書コーナー

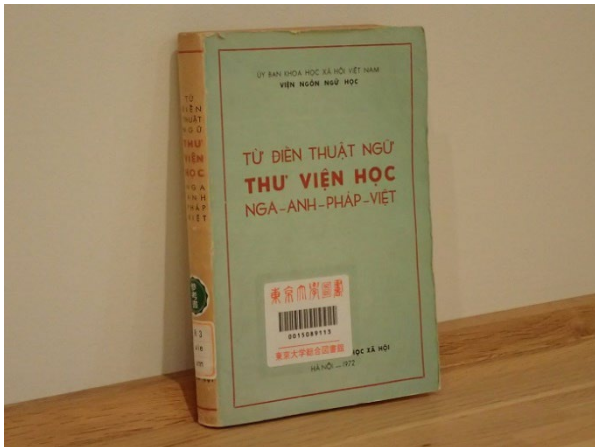
ブイ・ヒエンによれば、ベトナムは社会主義ベトナムの祖国の建設と防衛における役割、位置、需要を鑑み、英語、ロシア語、中国語、フランス語の四つの国際言語を広く教育すべき言語にするという方針を立てたが、その四言語の中の優先順位はそれぞれの時期の国際関係によって変化した。たとえば1968年にはロシア語、中国語、英語、フランス語という順であったが、1972年に

は英語、ロシア語、中国語、フランス語という順になり、1994年段階では英語が主要外国語とみなされた(Bùi Hiền 2005: 1)。また、田原によれば、ベトナム民主共和国期は国家建設モデルをソ連に求め、人材育成がソ連で行なわれていたので、ロシア語の重要さは際立っており、ロシア語の政治経済用語や科学技術用語がベトナム語に取り入れられていった。しかしながら1990年代中盤にはロシア語の学習希望者、学習者は人民軍か公安にしかいないという時代になったという(田原 2006: 27-30)。このような各時代の状況は、今回配架された辞書からも伝わってくる。

たとえば1957年に刊行された『哲学事典』(後掲一覧④)は、1955年にモスクワで出版されたロシア語哲学事典のフランス語版をベトナム語に訳出した辞典であるが、ベトナム語版出版にあたっては1955年に出版されていた中国語版が参照されたという。

1972年に刊行された『ロシア語・英語・フランス語・ベトナム語図書館学用語辞典』(後掲一覧⑥)は、(1)露-越の部、(2)英-越の部、(3)仏-越の部、(4)越-露英仏の部の4つの部から構成されている。(1)は一般的な対訳用語集だが、(2)(3)は英語ないしフランス語の用語と対応する(1)の見出し語番号の対照表、(4)はベトナム語の用語と対応する(1)(2)(3)の見出し語番号の対照表である。よってベトナム語から英語また

はフランス語を引くことは、(4)の対照表を経由して(2)ないし(3)に飛ぶことにより可能だが、英語ないしフランス語からベトナム語を引くためには、ロシア語の見出し語番号を経由しなくてはならない。このような構成からは、ロシア語を最重要と位置付ける一方で西側諸国の言語である英語やフランス語を没却しない姿勢が読み取れる。



『ロシア語・英語・フランス語・ベトナム語図書館学用語辞典』

『英越辞典』(後掲一覧⑧)は1975年6月にハノイで出版された辞典である。ベトナム戦争終結の約2か月後に1959頁の英語大辞典が刊行されたことは興味深い。

下記に五味政信氏旧蔵辞書の一覧を掲載する。ベトナム語に関心をお持ちの方のみならず、アジアの言語政策に関心をお持ちの方にもぜひ手に取っていただきたい。

<五味政信氏旧蔵辞書の一覧>

① Từ điển triết học / Do một nhóm nhà nghiên cứu triết học Liên-xô biên soạn dưới sự chỉ đạo của M. Rô-den-tan và P. I-u-đin. - Hà Nội : Sự thật , 1957.

② Từ điển Latinh-Việt tên thực vật / Nguyễn Minh Nghị. - Hà-Nội : Khoa Học và Kỹ Thuật ,

1970.

③ Từ điển Mèo-Việt : loại nhỏ / Nguyễn Văn Chinh. - Hà-Nội : Khoa học xã hội , 1971.

④ Từ điển thuật ngữ luật học Nga-Trung-Pháp-Việt / Ủy ban khoa học xã hội Việt Nam, Viện luật học ; biên tập Đỗ Khải. - Hà-Nội : Khoa học xã hội , 1971.

⑤ Từ điển học sinh : cấp II / chủ biên, Nguyễn Lương Ngọc, Lê Khả Kế. - Hà Nội : Giáo dục , 1971.

⑥ Từ điển thuật ngữ thư viện học Nga-Anh-Pháp-Việt / Viện Ngôn ngữ học. - Hà Nội : Khoa học xã hội , 1972.

⑦ Từ điển Tày-Nùng-Việt / Hoàng Văn Ma, Lục Văn Páo, Hoàng Chí. - Hà Nội : Khoa học xã hội , 1974.

⑧ Từ điển Anh-Việt : khoảng 65,000 từ / Ủy ban khoa học xã hội Việt Nam, Viện ngôn ngữ học. - Hà Nội : Khoa học xã hội , 1975.

⑨ Từ điển y dược Pháp-Việt / [chủ biên, Hoàng Đình Cầu]. - In lần thứ 2, có sửa chữa và bổ sung. - [Hà-nội] : Y học , 1976.

⑩ Từ điển toán học Anh-Việt / [Nguyễn Văn Thắng, Đào Minh Thông, Ngô Đạt Tú]. - In lần thứ 2, có sửa chữa và bổ sung. - Hà nội: Khoa học và kỹ thuật , 1976.

⑪ Từ điển hóa học và công nghệ hóa học Anh-Việt : khoảng 30.000 thuật ngữ / Nguyễn Thạc Cát. - Hà-nội : Khoa học và Kỹ thuật , 1977.

⑫ Từ điển Việt-Khmer / Hoàng-Học. - v. 1 ; v. 2. - Hà-Nội : Khoa học xã hội , 1977-1978.

⑬ Từ điển vật lý Nga-Việt : khoảng 24000 thuật ngữ = Русско-вьетнамский физический словарь : около 24000 терминов / [biên soạn và hiệu đính, Ngô Văn Bưu ... et al. ; biên tập, Cao Thị Xuân Cam ... et al.]. - Hà nội [Vietnam] : Khoa học và Kỹ thuật ; Москва : Tiếng Nga , 1978.

⑭ Từ điển tinh thể học Anh-Việt = English-Vietnamese dictionary of crystallography / Vũ Đình Cự, Quan Hán Khang. - Hà-nội : Khoa học và Kỹ thuật , 1978.

⑮ Từ điển nông nghiệp Anh-Việt = English-Vietnamese agricultural dictionary / [Lê Khả Kế, chủ biên]. - Hà Nội : Khoa học và Kỹ thuật , 1978.

⑯ Từ điển Anh-Việt các khoa học trái đất = English-Vietnamese dictionary of sciences of the earth / [biên soạn, Trương Cam Bảo ... et al.]. - Hà Nội : Khoa học và kỹ thuật , 1978.

⑰ Từ điển kinh tế / Chủ biên, G. A. Cô-dơ-lốp và S. P. Pe-rơ-vu-sin. - In lần thứ 3. - Hà Nội : Sự thật , 1979.

⑱ Từ điển địa chất / [biên soạn, Nguyễn Văn Chiển ... et al.]. -- Tập 1. -- Hà Nội : Khoa học và Kỹ thuật , 1979.

⑲ Từ điển địa chất / [biên soạn, Nguyễn Văn Chiển ... et al.]. - Tập 2. - Hà Nội : Khoa học và Kỹ thuật , 1979.

⑳ Từ điển thuật ngữ khoa học xã hội

Nga-Pháp-Việt / Ủy ban khoa học xã hội Việt Nam, Viện ngôn ngữ học. - Hà-Nội : Khoa học xã hội , 1979.

㉑ Từ điển tiếng Việt / do Nguyễn Lân chỉnh lý và bổ sung ; chủ biên, Văn Tân. - In lần thứ 3. - Hà Nội : Khoa học xã hội , 1991.

㉒ 现代越汉词典 = Từ điển Việt-Hán hiện đại / 雷航主编. - : 精装. - 北京 : 外语教学与研究出版社 , 1998.4.

㉓ 越汉辞典 = Từ điển Việt Hán / 何成 [等] 編. - 北京 : 商务印书馆 , 1999.3.

㉔ Từ điển sinh sinh viên / nhóm biên soạn, Vũ Ngọc Khánh, Phạm Minh Thảo, Lê Hoàng Minh. - Hà Nội : Văn hóa thông tin , 2004.

㉕ Từ điển tiếng Việt / Hoàng Phê, chủ biên ; Bùi Khắc Việt ... [et al.]. - Hà Nội : Hồng đức , 2019 printing.

㉖ Một số từ vựng kỹ thuật cơ bản - dành cho LHS = ベトナム人留学生のための日・越・英工学基礎辞典 / 長岡技術科学大学編著. - [長岡] : [長岡技術科学大学] , 2007.8.

< 参考文献 >

Bùi Hiền. 2005. “Cần dạy học những ngoại ngữ nào trong trường phổ thông Việt Nam?” *VNU Journal of Foreign Studies* 21(3): 1-6. <https://js.vnu.edu.vn/FS/article/view/2129>

田原洋樹. 2006. 「ベトナム社会主義共和国の言語教育状況に関する考察：ロシア語教育とドイモイ改革を中心に」『融合文化研究』7: 28-37.

[https://ishcc.stars.ne.jp/bulletin/07/b028\\_HirokiTahara.pdf](https://ishcc.stars.ne.jp/bulletin/07/b028_HirokiTahara.pdf)

## アメリカ国立公文書館調査記

河野 正

(国土館大学 21 世紀アジア学部 講師)

去る 2 月 12～19 日、アメリカ国立公文書館へ資料調査に出かけた。アメリカ国立公文書館は正式名称 **National Archives and Record Administration** (国立公文書館記録管理局) といい、通称 **NARA** と呼ばれる。**NARA** は各州に分館を持つが、本館はワシントン DC、ペンシルバニア大通り沿いにある。なお今回の出張に先駆け、知人に「ワシントンの **NARA** へ行く」と伝えたが、**NARA** を知らなかった知人が **Google** で検索したところ、奈良県にあるワシントンホテルの情報しかヒットしなかったようである。インターネットで情報収集をする際には注意が必要である。

文末の写真のように、**NARA** 本館はギリシャの神殿を思わせる荘厳な建物である。ここはミュージアムも併設する観光地であり、アメリカ合衆国憲法や独立宣言の現物が展示されている。これら貴重な展示物は、毎日閉館時間になると展示ケースごと地下に移動し、厳重に保管されている。後述する **Archives II** の閲覧室でも「資料は現物であり、替えがきかない貴重品である」ことが繰り返し強調されているが、歴史資料を厳重に保存しようという意図が見られる。

さてこのような貴重資料に囲まれた荘厳な環境で仕事を行なえばさぞかし捗るだろう、と思うのだが、私が調査を行うのは残念ながらここではない。ワシントンの本館が所蔵する資料は「連邦議会の史料、最高裁判所史料、ワシントン DC の地方裁判所、

一部の連邦政府機関および第一次世界大戦より前の陸軍関係史料、1940 年より前の海軍史料」とされている。そのため 20 世紀後半を主な研究対象とする私の利用すべき資料は所蔵されていない。そこで私が利用するのが、ワシントン DC に隣接するメリーランド州カレッジパークに位置する分館、通称 **Archives II** である。**Archives II** は、ワシントン DC の本館が手狭になったため、メリーランド大学から土地の寄付を得て、1994 年に開館した。本館とは異なるガラス張りの現代的な建築である。

**Archives II** が所蔵する主な史料は連邦政府の非軍事部門作成の史料、第一次世界大戦以降の陸軍史料、第二次世界大戦以降の海軍史料の他、写真や電子記録、動画、音声史料などである。特殊な史料群としては「ケネディ暗殺関係記録」というものもある。私が初めてここを訪れたのは 2011 年で、科研費等の資金がある時にはほぼ毎年訪れていたが、コロナ禍での中断を経て、今回は 3 年ぶりの利用となった。

アメリカ国立公文書館、特に **Archives II** は仲本和彦氏による『研究者のためのアメリカ国立公文書館徹底ガイド』(凱風社、2008) というガイドブックが存在する。しかし細かい利用規定など頻繁に変更になることもあり、またコロナ禍での運用など、本書による紹介とは異なることも多い。そこで本調査記は備忘録もかねて、最近の状況について示すこととする。私のように数

年ぶりに NARA を利用しようという研究者の目に留まる機会があれば幸いである。

上述のように Archives II はワシントン DC の郊外、メリーランド州カレッジパークにある。私の知る日本人研究者でもカレッジパークに宿泊する人も少なくない。とはいえ食事などを考えるとワシントン DC に宿泊するのは便利だし、調査を終えた後、夜のワシントン DC を散歩するのも捨てがたい。ワシントン DC から、地下鉄と路線バスを乗り継げば Archives II に移動することも可能だが、それも些か不便である。そのような利用者に便利なのが、8~17 時まで毎正時に Archives I と II の間で運行されているシャトルバスである。

Archives II に到着するとまずは手荷物検査がある。公文書館という比較的ソフトな組織ではあるが、ここはアメリカであり、また連邦政府の機関でもある。そのため非常に大きな拳銃を身につけた警備員に荷物チェックをされる。余談ながら、以前空港から直接閲覧に来たことがあり、その際には免税店で購入したアルコール類が引っ掛かったことがある（連邦政府機関はアルコール類持ち込み禁止）。その際には建物外のゴミ箱に廃棄するよう指示され、その裏では退館までゴミ箱に入れておいて、帰る時に回収すればよいとアドバイスを受けた。愛飲家の方々は一応要注意である。

本来ならば荷物検査の後にはスムーズにロッカー等へ移動できるのだが、現在はコロナ禍における特別運用がされており、閲覧が全て予約制となっている（民間のイベント予約サイトを利用する形式になっている）。このため、荷物検査の際に予約者一覧と姓名が照合され、その後受付カウンターに行き、同じリストの自分の名前の横に署名するという作業をしなければならない（日によっては素通りできることもある）。

初回利用および閲覧証 (Researcher Card)

の期限が切れた際（期限は 1 年）には閲覧証の発行が必要となり、発行カウンターは荷物検査の隣の部屋にある。ここでは必要書類の記入、PC によるオリエンテーション、写真撮影を経て閲覧証が発行される。

数年ぶりに訪れたところ、オリエンテーションが一新され、途中でクイズ形式の問題を解かねばならない仕様になっていた（不正解でも先に進むことはできる）。また、NARA のウェブサイトから事前にオリエンテーションだけ受講しておくことも可能となり、当日の時間短縮が可能となった。

加えて、これまで顔写真入りのプラスチックカード（磁気テープ付）が発行されていたのが、QR コード付きの紙カードに変更となった。恐らくプラスチックゴミ削減が目的かと思われるが、今までは警備員やスタッフに手渡して磁気テープを読み取ってもらっていたのが、自分でスキナに QR コードを読み取らせる方式に変更となった。コロナ禍での接触回避という側面もあるのかもしれない。

さて閲覧証が発行されると今度は地下のロッカールームへ向かう。閲覧室へ持ち込めるものは制限されており、カバンや上着など持ち込めないものをロッカーに預ける。昔ながらのコインロッカーで、25 セント玉が必要となるため小銭を用意しておく必要がある。ロッカーを開く際に 25 セント玉は返却されるので、2 日目以降は同じ 25 セント玉を使用するようにして、財布と分けておけば小銭不足に困ることはないだろう。

荷物を預けると、いよいよ閲覧室へ向かう。Archives II はフロアごとに文字資料、写真資料、マイクロフィルムなど分かれており、文字資料 (Textual Records) は 2 階にある。1 階の Record Complex 入り口では毎回、2 階の閲覧室入り口ではその日の最初の入室と最後の退出の際に閲覧証の提示が求められる他、ノートパソコンなどは開いて、

中に紙などが挟み込まれていないか出入りの度に確認される。

以前は 2 階閲覧室の中に、目録類が並びアーキビストが常駐する Consultation room があり、そこで資料検索ができたが、コロナ禍を経て Consultation room が 3 階に移動していた。最近では NARA の OPAC で資料に当たりをつけることが容易になったが、それでも資料の配架場所（資料の申請書は請求記号ではなく資料の Location を記入するようになっていたため、その情報が必須）や Box 数などは、ここでアーキビストに問い合わせないと分からないものが多い。

申請書の記入が終わると 2 階閲覧室の出納カウンターに渡せばよい。以前は別に申請書の回収ボックスがあり、しかも 1 時間に 1 度しか出納のタイミングがなかった（しかも昼前後は休み）。現在は随時となり、利便性が大幅に改善された。またコロナ対応のために「ソーシャルディスタンス」をとるため、1 人当たり 2 人分のデスクを使用できる体制になり、大変便利であった。

他方、昔から変わらず不便な点もあるので挙げておきたい。以下の写真を見ると分かるように、Archives II は南東側が全面ガラス張りであり、閲覧室は東側の窓に面している。そのため特に午前中は日差しが降り注ぎ、史料の撮影の際には影がしやすい。また、アメリカの公共施設全般に言えることだが、夏の冷房が非常に強く、閲覧室に一日滞在すると、午後には寒さに震えることになる。しかし閲覧室は上着の持ち込みは禁止である。

今回は月曜の午前中にこのように資料を申請・出納した後、金曜日午後までたっぷり 5 日間資料を閲覧することができた。今回は Voice of America による対中国宣伝および朝鮮戦争時期の中国人捕虜の尋問記録を中心に閲覧を行った。なお申請すれば閲覧室内での資料撮影は自由であり、必要な

資料については持参したスキャナでスキャンを行った。その際注意が必要なのは、国立公文書館が所蔵する史料の大部分は、当初機密指定されていたものが、時を経て機密解除されたものだという点である。そのためコピーや撮影の際には「機密解除済み」であることを証明する紙片をともに撮影する必要があり、この紙片をもらうために毎日最初に撮影をする前に申請を行わなければならない（これを怠ると注意される）。

今回閲覧した資料はどちらも膨大であり、今後引き続き調査を行う予定である。

#### 追記

本調査は東京大学ヒューマニティーズセンター公募研究 (A) の助成を受けた。深謝の意を表す。



NARA 本館 外観



Archives II 外観



## Oriental Research Institute Mysore 他3館での初調査

谷口 力光

(人文社会系研究科 博士後期課程)

2023年2~3月末にかけて、海外でサンسكريット写本・希少本を調査した。筆者はヒन्दウ法(Hindu law、ヒन्दウ教徒にとっての法律)を専門としている。今回は筆者にとって初めての海外調査で、結婚・相続法についてサンسكريットで書かれた論稿やベナレス法会議(“Benares Dharmasabha”)のレポートなどを調査した。

訪れたのは、①大英図書館(British Library、London)、②ボドリアン図書館(Bodleian Library、Oxford)、③Bharat Kala Bhavan (Varanasi)、④Oriental Research Institute、Mysore (University of Mysore) —の4館だ。入館などの手続きについては、公式Webページや、例えば、片岡啓先生(現九州大学教授)によりまとめられている<sup>1</sup>。

本稿ではむしろ体験レポートのような形で、困った点や現地で聞いた情報などを共有したい。この手の体験談は「口頭伝承」が多く、渡航前の事前調査ではなかなか情報をえることができなかつた。筆者のつたない調査にアドバイスやより良い代替案などをご教授頂ければ望外の喜びである。

① 大英図書館に訪ねたのは不運な時期だった。筆者が滞在した3月初旬にはスキャナーが使用できず、またサンسكريット写本は一律で自主撮影不可に評価替えされ

ていた(ただし、キュレーターに相談すれば個別には許可が下りた)。

検索可能な形でデジタル化されていない写本カタログも多く、カタログ現物を見る必要性は今でも予想以上に高い。カタログ現物が配架されているAsian and African Studies 閲覧室を常に利用した。

ちなみに、大英図書館ではマイクロフィルムがあれば自分でもコピー(crop)できるし、廉価でデジタルコピーを依頼できる。カタログ記載の写本がマイクロフィルム化されているかどうかは、写本の書架記号(shelfmark)を特定した上で、同閲覧室の窓口で借りられる帳簿で調べることができた。

② ボドリアン図書館では、利用者カードの発行申請をする時点で閲覧したい図書を特定しておかなければならない。また、オンラインカタログ(SOLO)で、“Location Items”欄に“Stored Offsite”と記載されているものは、5営業日前までに予約が必要である。

これが少しトリッキーだった。オックスフォードでの滞在はごく短期だったので、利用登録よりも前に資料の予約をしておかなければならなかつた。

ところでボドリアン図書館特別コレクションの複写サービスは大変優良だった。分

(これらの調査の一部はJSPS科研費22J11284, 22K19953の助成を受けた)

<sup>1</sup> [https://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/asj/eng/html/guide/india/i\\_11\\_f.html](https://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/asj/eng/html/guide/india/i_11_f.html) (Accessed June 10, 2023).

量はケースバイケースらしいが、撮影サービスが無料で提供されている。

③ Bharat Kala Bhavan はバナラス・ヒンドゥー大学 ([Banaras Hindu University](#)) 附属博物館である。同大学では、中央図書館 (Sayaji Rao Gaekwad Central Library) と Bharat Kala Bhavan にサンスクリット写本が所蔵されている。

最初は中央図書館のライブラリアンに滞行者カード (Consultation card) を発行してもらった。バナラス・ヒンドゥー大学所蔵写本のカタログは、中央図書館の写本セクションにいる職員に依頼すれば閲覧できた。カタログで番号が C から始まる写本は中央図書館、B から始まるものは Bharat Kala Bhavan に保管されている。

筆者はすぐに Bharat Kala Bhavan に移動した。中央図書館でカードを発行していたことが功を奏したのか、博物館での交渉はかなりスムーズに進んだ。館長室で写本を確認して全葉の撮影を依頼した。すぐにベナレスを発つことを伝えるとオンラインで費用を払っても良いことになった。ちなみに撮影完了の連絡があったのはこの日から 13 日後で、費用は 10 ルピー/枚 + 税 18 パーセントだった。



1 Bharat Kala Bhavan

(入って左側のチケットカウンターで滞行者カードを見せて事情を話した。荷物はここで鍵付きロッカーに預けるので、スマホと書類だけを持ち込むことができた)



2 Oriental Research Institute, Mysore

(写真手前から館長室、副館長室という順番。真ん中の高くなっている部分に写本が保管されていて、そこでファーストコンタクトが取れた)

④ Oriental Research Institute では写本閲覧までは副所長 (Deputy Director)、複写は所長からの許可が必要だった。写本複写は 1 人 (グループ) 2 写本までで、マイソール大学総長からの許可があれば 5 写本まで許可されるそうだ。ただし、その場で写本から転記することは許された。

一般図書の所蔵目録からは、インド外にまで流通しなかった希少本がいくつも見出されたことは大きな収穫だった。しかも、一般図書については、驚くことに複写枚数の制限がなかった。内訳は確認し忘れたが、100 枚ほど自分で撮影して、支払った手数料などは 2000 ルピー程度だった。

インドに滞在中は [National Mission for Manuscripts](#) による活動について何度か話が持ち上がった。また、Oriental Research Institute Mysore は写本のデジタル化事業に着手し、海外からも閲覧できるようにするそうだ。このようなデジタル化事業に向けられる期待は大きい。

今回は筆者の初めての調査旅行だったこともあり、ままならないことがここに書ききれない程にあった。同地で初めて調査する予定の方にこのレポートがガンジス川の砂粒コップ 1 杯分でも役立てば嬉しい。

連載 アジアの言語・文字体系 第7回

## デモティックの学習について

宮本 彩芽

(広島大学人間社会科学研究所人文社会科学専攻 博士課程後期 2 年)

前 5 世紀のギリシャ人著述家ヘロドトスは著作『歴史』で次のように述べている。「彼ら（エジプト人）はふたつの文字を使っており、ひとつは神聖文字、もうひとつは民衆文字と呼ばれている。(διφασίοισι δὲ γράμμασι χρέωνται, καὶ τὰ μὲν αὐτῶν ἰρὰ τὰ δὲ δημοτικά καλέεται.)」(II. 36. 4) ここで言う「神聖文字」はすなわちヒエログリフであり、「民衆文字」はデモティックである。

デモティックとは紀元前 650 年頃から紀元後 450 年頃まで用いられていた古代エジプト語のひとつであり、行政文書や法律文書、私信、宗教文書、文学、勅令を記した石碑など、様々な場合で筆記用文字として使用されていた<sup>1</sup>。デモティックの文法自体は新エジプト語やコプト語と似ているため既習者にとってはさほど難しくはないが、書記によって字体が変わると称されるほどその文字の判読は難しく、日本でデモティックを教えている大学は恐らく皆無であるだろう。一概には言えないものの、このことは日本で前 7 世紀以降の古代エジプト、つまり末期王朝時代～プトレマイオス朝期の研究があまりなされない一因ではないかと筆者は感じている。

私事ではあるが、筆者は 2023 年冬学期よりドイツのエバーハルト・カール大学テュービンゲン (Eberhard Karls Universität

Tübingen、通称テュービンゲン大学) への留学を予定している。留学許可をくださったテュービンゲン大学の教授は、留学前であるにも関わらず、オンラインで行われるデモティックの授業への参加も認めてくださった。そのため、2022 年 10 月から現在まで継続して聴講生としてデモティックの授業を受講している。本稿では、授業で使用された教科書や推薦された辞書等を紹介したい。そのほとんどがネット上で公開されており入手しやすいため、今後デモティックを学習したいという方々の参考になればと思う。

まず教科書として Johnson, Thus Wrote 'Onchsheshonqy; An Introductory Grammar of Demotic (3rd ed.), SAOC 45, Chicago, 2000 を使用している。この教科書はタイトル通り、プトレマイオス朝後期に作成され、アクミームで発見された P. British Museum 10508 に記述されている『アंकシェションキの教訓』を文字・文法の教材としている。このテキストはひとりの書記によって記されていること、そして『アंकシェションキの教訓』は基本的な文法を網羅していることから初学者が文法の学習に集中できるため教材にふさわしいものである。この教科書の特徴として、文法解説に使われている例文だけでなく、単語リストや練習問題に

<sup>1</sup> Johnson, *Thus Wrote 'Onchsheshonqy; An Introductory Grammar of Demotic (3rd ed.)*, SAOC 45, (The Oriental Institute of the University: Chicago), 2000, p. 1.

も実際の原文または一部を加工したファクシミリが載せられている点がある。授業では講師がそれらを使って単語の区切りだけでなく単語を構成する文字をひとつひとつ細かく解説し、学生は練習問題の転写と翻訳、使われている文法の判断を毎週の課題として課された。

しかし、やはりデモティックの文字判読は難しいため Memrise というアプリを用いて文字や単語を覚えるように指導された。Memrise には Johnson の教科書から文字・決定詞・単語がそれぞれ 1 つずつ学習コースとして登録されており、Memrise に登録さえすれば誰でも利用可能となっている。以下にそれぞれの URL を示しておく。文字：<https://app.memrise.com/course/5413723/demotic-signs/>、決定詞：<https://app.memrise.com/course/5413764/demotic-determinatives/>、単語：<https://app.memrise.com/course/5413774/thus-wrote-onchsheshonqy-vokabeln/>

次に辞書を紹介する。いくつか推薦されたが、基本的なものは Erichsen, Demotiches Glossar, Kopenhagen, 1954 と Johnson, The Demotic Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago, 2001 (通称 Chicago Demotic Dictionary (CDD)) である。CDD は Erichsen の辞書の後継で、1955 年以降に刊行されたテキスト中の語彙を追加するといった補足や情報の更新が行われているため、常に Erichsen の辞書と CDD 双方を参照する必要があるだろう。また、これらは当然のことながら単語の頭文字がどのアルファベットに相当するか判断できなければ引くことができない。そこで重宝するのが Erichsen, Demotische Lesestücke. Band I: Literarische Texte mit Glossar und Schrifttafel. 3. Heft: Schrifttafel, Leipzig, 1937 である。これには文字リストが記載されており、縦長・斜め・横長といった文字の形態から単語の読みを調べることができる。

また、オンラインで使える辞書として Thesaurus Linguae Aegyptiae (TLA)(<https://aaww.bbaw.de/tla/>)と Demotische Wortliste (DWL)(<http://www.dwl.aegyptologie.lmu.de>)を紹介する。TLA はログインの後に“search the list of Egyptian words”を選択すると“search the list of lemmata”というページが開く。検索ボックスのうち、“Lemma”にデモティックの単語の読みを入力し、“list of lemmata”を“Demotic”に変更することで、単語の意味を検索できるという仕組みになっている。また DWL は決定詞も含めて検索することができ、例えば先頭の文字がわからなくても、残りの文字の読みと決定詞を入力することで単語の候補を出してくれるという優れものとなっている。決定詞の入力方法は“Hinweise”内に決定詞のコードがあるのでそちらを確認していただきたい。ただし、TLA と DWL はあくまでも読みから意味を検索するサイトとなっており、デモティックの文字自体を参照することはできず、提示される意味も基本的なもののみである。当該語が掲載されている Erichsen の辞書や CDD 等のページ番号も併せて示されるため、デモティック学習の際には文字のヴァリエントや用法を複数掲載している Erichsen の辞書と CDD が必須である。

デモティックの特徴として、書記によって字体が異なることを挙げたが、Demotic Palaeographical Database Project (DPDP)(<http://129.206.5.162/beta/palaeography/palaeography.html>) はオンラインで使える辞書として有用である。まだ完全なサイトではないようだが、地域的、通時的な比較が可能という点で非常に便利なものとなっている。

実際にデモティックのテキストを読む段階になると、人名に悩まされることがある。その際には Lüddeckens, Demotisches Namenbuch, 3 Bände, Wiesbaden, 1980-2000 が便利である。エジプト人名だけでなくギ

リシャ語の人名をデモティックにしたものや多くのヴァリエントが掲載されており、特に行政文書など個人名が頻出する史料を読む際には必須の辞典である。

授業では現在、文法事項の学習は終了し、実際にデモティックのテキストを読解する段階に進んでいる。今学期は『アंकシェションキの教訓』、家財相続に関する証書、アトリビスで発見されたオストラコンに書かれてあるデモティックのテキストを読解する予定となっている。やはりデモティックの文字そのものを見ながらテキストを読み進めることには難しさがあり、上述した辞書等を何度も引きながら予習するのは辛くもあるが、同時にここまでが一単語で、この構文は何で、と判断できたときは非常に楽しく、達成感がある。筆者自身はまだデモティックを学習し始めて1年にも満たず、まだまだ未熟ではあるが、エジプト学の本場のひとつであるドイツでデモティックを学習できたという体験を共有できる機会をいただけたことに感謝している。今後、テキストの読解を進めていく中で新しいツールや気づきがあれば、また別の機会にお話しできればと思う。

最後に、オンラインでのデモティックの授業参加を許可してくださった Dr. Christian Leitz 教授と、日本のデモティック学習の環境を少しでもアカデミックなものにできるのならば、と快く授業内容や教科書、辞書等を紹介するこの記事の執筆を許可してくださった講師 Marcel Moser 氏に深く感謝いたします。

# アジア研究図書館利用案内

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/user-guide>

場 所	総合図書館4階
開館日／閉館日	総合図書館の開館日・閉館日に準じます。
開館日	以下閉館日を除くすべての日
閉館日	年末年始(12月28日～1月3日) 定例休館日(おおむね毎月第4木曜日) 夏季の一斉休業日(2日間) 試験等大学行事のための閉館日 その他臨時閉館日

## 開館時間

	曜日等	通常期	8月・3月
	月～金曜日	8:30～22:30	8:30～21:00
	土・日・祝日	9:00～19:00	9:00～17:00

学外の方もご利用いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/user-guide/outside/gakugai>

## 次号の予定

第13号は令和五年十月二日に発行予定です。

ニューズレターへの情報提供、投稿や、記事へのご要望があれば、東京大学アジア研究図書館 ([asia.lib\[at\]lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:asia.lib[at]lib.u-tokyo.ac.jp))までお知らせ下さい。

## 編集後記

第12号をお届けします。

本号の内容は多彩なものとなりました。さらに今号では、二名の大学院生が投稿しています。このようにアジアにかかわる研究活動の一端を報告する場としても本誌はひろく開放されています。若手、中堅、ベテランを問わず、皆様の積極的な投稿をお待ちしております。(J)